

最終章  
遠イ明日デ  
【藤田／現代エンド】

見上げれば、夜空には赤い満月。

妖しいその光が、闇夜の中に佇む鹿鳴館をぼんやりと浮き上がらせている。豪華な門の前に立つ私を、バスルドレスに身を包んだ淑女たちが追い越していく。

(……やっぱり、ドレスじゃなきゃ駄目だよね)

ちゃんとしたドレスだって持つてるのに、なんで制服なんか着て来ちゃったんだろう。思いきり浮いているのは百も承知だけど、いまさら着替えに帰るわけにもいなくて。

(だって私は、チャーリーさんに会いに日比谷公園に行かなきゃいけないんだもの)

でも今夜開かれる鹿鳴館のパーティーには、八雲さんがいる。

(少しだけ。ほんの少しだけ……)

自分にそう言い聞かせながら、私は鹿鳴館のダンスホールを目指して庭園を歩いて行く。つかの間だけ、最後に夢を見るために。

「おい、今夜はマジックショーがあるらしいぞ」

「ほう、松旭斎天一か。最近よく聞く奇術師だな」

ダンスホールに入ると、一気に喧噪に包まれた。人に酔いそうになりながらふらふらと歩いていると、

「やあ、芽衣ちゃん」

「っ！」

背後から私の肩を叩いたのは、チャーリーさんだった。

「はは、驚かせてしまったようで悪かったね」

「ほ、ほんとにびっくりした」

まさか、こんなところで会えると思わなかった。てっきりチャーリーさんは日比谷公園にいたかと思っていたから。

「で、誰を探していたのかな？」

「え？」

「僕は君と、満月の夜に日比谷公園で待ち合わせしていたはずだ。でもおかしなことに君は今、僕との約束とは違う場所にいるようだからね」

(あ……)

「もしかしたら君は、誰か別の人と約束でもしていたのかな？　と思ったんだよ」

(違う、そうじゃないの。チャーリーさん)

でもなにを言っても言いわけのようになってしまいう気がして、私は押し黙った。

「その人は、君にとって大事な人なのかな？」

なおも彼は、その話題で食い下がってくる。

「さあ、よく考えて。これは大切な質問だよ？　君にとってその人は、現代での生活より

も大切なものなのかな？」

「それは……。よくわからない」

実はまだ迷ってる。

現代に帰らなきゃ……と思いつつも、この時代に心残りがあるのもたしかだ。

「……へえ？　あんなに帰りたいたっていったのに？」

そう、私はつい最近まで、自分が現代に帰ることを選ぶと信じて疑わなかった。

(でも、どうして……帰らなきゃいけないと思うんだろ?)

家族や友達が待っているから?

生まれ育った世界だから?

すべてを捨てるのは無責任だから――?

(じゃあ、私を好きになってくれたあの人を置いて帰ることも、無責任なんじゃないの?)

私がいなくなったら、あの人はどう思うんだろう。

私がないこの世界で、私のことを探し回ったりするのかもしれない。

まさか私が違う時代に帰ったとは思わないだろうから。

(――そんなことさせたくない)

私を必要としてくれるなら、そばにいたい。

「誰か、大切な人ができた?」

私ほうなづいた。まぶたの裏が熱くなる。

「その人と離れたくないんだね」

もう1度、うなづいた。

たったそれだけの理由で私はここから動けずにいる。私がもう少し大人なら、きつとこんな気持ちに振り回されたりしないのかもしれない。

「それなら、離れなければいいよ」

チャーリーさんは難なく答えた。

「離れたくなければ、離れなければいい。おそらくその人も君と同じことを思っているはずだ」

「……そんなのわからない。簡単に言わないで」

「いや、簡単な話さ」

「どんなに大がかりなマジックでも、タネあかしをしまえば仕掛けなんて拍子抜けするほど簡単なものなんだよ」

「……？」

説得力があるような、ないような。よくわからないたどえだった。

「信じられない？　じゃあ、これからすごいマジックを見せてあげよう」

「え？」

「芽衣ちゃんだけの特別サービスだ。今から、ここに君の大切な人が現れるからね」

「なに言ってるの」

そんなはずない。

現れるわけがない。

「心配しなくても大丈夫だよ。明治だろうが現代だろうが、どこにいたって彼は君のこ  
とを大切にしてくれるはずだから」

「チャーリーさんっ」

だんだんと喧噪が遠のいていく。人々の笑い声も、風が木々を揺らす音も。

——赤い月だけが、暗闇を照らし出す。

（チャーリーさん）

私は何度も呼びかけた。

(教えて。あなたは誰なの?)

その問いに答える代わりに、彼はニヤリと道化師のような笑顔を浮かべた。

「幸せになるんだよ、芽衣ちゃん」

ぱちんと、大きく指を鳴らした。

\*

「——おい」

(え?)

「なにをぼんやりとしている。通行人の邪魔だ」

気がつけば、目の前に藤田さんがいた。生演奏のオーケストラとダンスを踊る人々を背景に、彼はむっすりとした顔で私を見下ろしている。

(あれ、チャーリーさんは?)

さっきまでこのフロアにいたはずなのに、忽然とその姿を消してしまった。まるで、最初からそこにいなかったかのように。

「聞いているのか。また迷子になっても知らんぞ」

「……………」

藤田さんはあいかわらずだ。初めて出会った時とあまりに状況が似ているので、時間をさかのぼってしまったのではないかと真剣に考えた。

(……………でも)

状況は似ているけど、初めて出会った時とは確実になにかが違う。ただただ怖いとか思えなかった藤田さんの目が、今はこんなにも優しく思える。

「まったく、おまえという娘は。手間のかかる……………」

藤田さんは私の手を取り、人混みの中を歩き出した。

(どこに行くんだろう)

夜会に向かう人々とは逆の方向に、藤田さんは迷いなく歩いていく。着飾った紳士淑

女たちは、私たちに目もくれない。けらけらと笑い声をあげながら軽やかに通り過ぎる。庭園の真上には、赤い満月。妖しく照らされた夜道を、その広い背中が誘っていく。

「……藤田さん。私たちはどこに向かっているんでしょう」

「警視庁に行くとも思ったか？」

どこかからかうように彼は言い、私は慌てて首を振る。

「冗談だ。おまえの帰るべき場所は、もう調べがついているからな」

「……私の帰るべき場所？」

いったいどこだろう、と考える。今、私の隣りには藤田さんがいて、ここ以外に帰る場所なんて思いつかないけど。

「おまえをいつか帰してやりたいと、そう思っていた。できれば俺の手で――」

強く握りしめられた手。私もその手を、強く握り返す。はぐれないように。

（……そっか。帰るんだ）

ガス灯のきらめきと華やかな鹿鳴館。鉄道馬車と人力車が行き交う銀座の街。今、私た

ちはさよならを告げている最中なんだと思った。背後から遠ざかるすべてのものに。

「――帰るぞ。いいな」

「はい」

帰りたい、1人ではなく2人で。

「もう、1人ではどこにも行くな。俺がおまえの道しるべになる」

私は頷き、赤い月が照らす道を歩いて行く。このままどこまでも歩いていける気がした。

この人が、ずっと手を引いてくれるなら――。

\*

――まぶたの向こうに、やわらかな光を感じた。ざわざわと人の気配。子どもたちの笑い声。

(ここは……)

私は、この場所を知っている。あれは、今からちょうど1カ月前――

「さあ、お立ち会いお立ち会い！ 手前ここに取り出し出したる陣中膏はこれ、ガマの油。ガマと言ってもそんじょそらのガマとは物が違う！」

「ハイご通行中の皆様、容貌奇妙にして珍妙なるこの娘、親の因果が子に報い、生まれ出たるはへび女！ お代はあとで結構だよ、ハイ入って入って〜」

――私が明治時代に飛ばされてしまった、あの夜に訪れた縁日だ。

そして私の隣には、藤田さんがいる。

彼は私の手を握りしめ、すでになにかを悟ったような顔で、私を見下ろしていた

(どうして、ここに……?)

ただ1つわかるのは、ここは現代だということ。

どうやら私と藤田さんは、チャーリーさんの不思議なマジックによって、2人一緒に現代へと飛ばされてしまったらしい。

そして現代に帰ってきた私は、チャーリーさんの言葉どおり、すべての記憶を取り戻していた。

\*

私は東京都のとある普通高校に通う、女子高生だ。成績は中の中、多くはないけど少なくとも友達に囲まれ、平凡な高校生活を送っていた。家族構成は、両親と妹が1人。親は骨董品屋を営み、私は幼い頃から古いものに囲まれて育った。飴色の茶箆筒に細竿の三味線、紫壇の文机。切子細工のガラスの灰皿。そんな古いものの匂いや手触りが好きだったことを、現代に帰ってきてから思い出した。

\*

——それから1年後。

藤田さんは今でも、文京区本郷にある自宅で静かに暮らしている。昼間は師範代として自宅近くの道場で剣を振るい、多くのお弟子さんたちを指導する日々だ。

なんでも『凄腕の剣豪がいる』との噂が静かに広がり、全国から弟子入りを希望する人たちが集まってくるらしい。本人は『騒がしいのは好かん』なんて言ってるけど、多くの人々と剣を交えている時の彼は、生き生きしているように見えた。

……藤田さんはもう、明治時代には帰らない。

この時代で剣の道に生き、剣の教えを後世に伝えていくことを決めた。その強さゆえに『死に損なった』と自嘲する彼と、これから先、どこまでも一緒に歩いていきたい。

たまに縁側に座って、移ろいゆく季節を眺めながら――。

1人ではなく、2人で。

夕焼け色に染まる道場でただ1人、藤田さんは胴着を身に纏い息1つ乱さずに刀を振るっている。私は息をするのも忘れ、淀みない動きに目を奪われていた。稽古の邪魔にならないよう、物陰に隠れ、こっそり彼の姿を眺めはじめてからどれほどの時間がたっただろう。ふと、藤田さんは動きを止めると、刀を鞘におさめてから私が隠れている場所へ視線を向けた。

「……そんなところで、さっきからなにをしている」

(……やっぱり、ばれてるよね)

藤田さんの問いかけに私はおとなしく物陰から出て行った。

「取り込んでいるようだったので、なんとなく……声をかけづらくて」

そう言って、私は藤田さんへ真っさらなタオルを差し出した。

「……めずらしい気づかいもあるものだな」

\*

「めずらしいって……」

失礼な、と言おうとしたところで、差し出されたタオルを手にとりながら、藤田さんはくすりと笑う。

「ふん。冗談だ。では失言を詫びる代わりに、剣の稽古をつけてやる。好きな得物を選んで、どこからでもかかってこい」

「え、遠慮します!!!」

私は慌ててぶんぶん顔を振った。

「遠慮は無用だ。天然理心や無外やなんだと、流派を気にする必要はないぞ」

「いやいや、流派とか知りませんし……」

「実戦では形など関係ない。度胸のある者と逃げ足の速い者だけが生き延びられる。ふっ……凶太いおまえなら、存外いい線いくかもしれんな」

「……………」

「冗談だ。そんなにむくれるな」

唇を尖らせる私を見て、藤田さんは喉の奥でクツと笑う。

「……まあどんな状況であれ、俺がおまえを守ることに変わりはないがな」

「……っ」

その、飾りけのないまっすぐな言葉に頬が熱くなるのがわかった。

「……しかし、今は平和な時代だな。黒船が浦賀沖に来航してから、わずか160年やそこらで世界がこれほどまでの変容を見せるとは……」

藤田さんは明治のことを思い出しているのか、心ここにあらずといった面持ちだ。

「あの時代の誰が想像しただろう……。かなうことなら見せてやりたい景色が山ほどある」

「ふふっ、八雲さんが見たらびっくりするでしょうね」

そのシーンを想像して、私の口から思わず笑い声が漏れた。

「ふん。それは当然、腰を抜かすだろう。奴は懐旧主義者だからな。むしろ見せないほうが賢明かもしれん……。それよりどうした、急に小泉の名前など出して。なぜ、奴のことを

思い出した？」

藤田さんの口調には、微かな苛立ちが混じっている。

「えっと……ただ、なんとなく」

「おまえはただなんとなくでよその男のことを夢想したりするのかわ。それもよりによって小泉など、思考の無駄遣いにもほどがある」

あんまりな言われように、遙か遠い時代を隔てた八雲さんのことが気の毒になった。

「そんなどうでもいいことを考えるよりも、もっと考えるべき事案はたくさんあるはずだ。遠い時代にいる男のことではなく、もっと優先すべきことが……」

ドキリと胸が高鳴る。

「私はいつだって……藤田さんのことを一番に考えてます」

私は藤田さんをまっすぐに見つめ、素直な言葉を口にする。

すると彼は、私の腕を掴んで引き寄せ、強く抱きしめた。

「……それでいい。今は、目の前にいる男のことだけを考えろ。俺も今は、目の前にいる

女のことだけを考えている。俺が惚れた、たった1人の女のことだ」

その力強い腕に身を委ねる。伝わってくる胸の鼓動に呼吸を合わせながら。

「もう、目を離したりはしないからな。おまえはふらふらするだけでなく、おかしい時代に飛んでいってしまいう前科もある。とてもじゃないが、目を離したりはできんだろう…だから、ずっと俺の腕の中にいろ。俺が追いつけないところには行くなよ。どこにいても…おまえの心がここにあることを、忘れるな」

（忘れないよ、藤田さん）

めまぐるしく変わる時代の流れを、これから一緒に見届けていく。

今、この時代で。心を添わせながら――。

） F I N （